Q4－1　児童生徒の日本語能力を把握するためには、どのような方法がありますか。

A　客観的な基準で児童生徒の日本語能力を把握する方法の１つとして、日本語能力測定方法「**DLA**～外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント」（平成 26 年３月　文部科学省）があります。

「**DLA**」は、<u>日常会話がある程度できていながら、教科等の学習に困難を感じている児童生徒</u>を対象としています。

日本語能力は、母語、年齢、入国年齢、滞在年数（四大要因）による影響や年齢にともなう認知力の発達段階を考慮する必要があり、こうした課題を踏まえて開発されたのが「**DLA**」です。

「DLA」の概要（「外国人児童生徒のための JSL 型アセスメント」文部科学省　平成 26 年）

(1)「**DLA**」が測定しようとしている言語能力

・「**DLA**」は、〈はじめの一歩（「導入会話」及び「語彙力チェック」）と、〈話す〉〈読む〉〈書く〉〈聴く〉の４つの言語技能から構成されています。

【テストと測定能力】

測定能力／テスト	会話の流暢度	弁別的言語能力	教科学習言語能力
◆　導入会話	○		
◆　語彙力チェック		○	
●　話す	○	○	○
●　読む		○	○
●　書く		○	○
●　聴く			○

◆〈はじめの一歩「導入会話」「語彙力チェック」〉は、「**DLA**」を進めていく上での参考情報が得られ、児童生徒の生活環境や言語環境をよりよく知ることができます。

(2)「**DLA**」の測定結果に基づく支援段階（JSL 評価参照枠〈全体〉）

・「JSL 評価参照枠〈全体〉」とは、日本語の力を６段階（ステージ）に分けた評価枠のことです。

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き自律学習段階 ※必要に応じ支援
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にもある程度参加できる	個別学習支援段階 ※個別的な指導
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援段階 ※手厚い指導
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	

Q4－2　「DLA」を実施する際の配慮について

① 日ごろから接している子どもに対して、改まって日本語のテストのようなことをする際、どのような配慮が必要ですか。

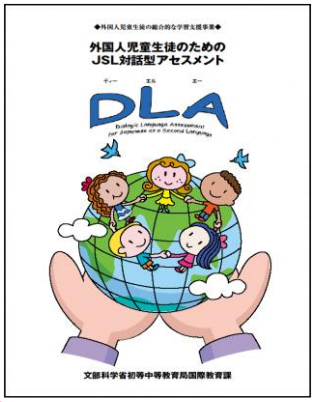
A 「DLA」は、いわゆる画一的なペーパーテストではなく、「対話型」で行います。対話を通して、児童生徒とのラポール（共感できる信頼関係）を築き、もっている力を十分に発揮できるよう配慮します。

② 専門知識が無く、訓練も受けていないのですが、対話型のテストができるでしょうか。

A 「DLA」には、実施すること自体が指導者と児童生徒が向き合う大切な機会になるという狙いがあります。精度の高い評価を行うには一定の訓練を要しますが、その前にまずは「DLA」で児童生徒と向き合い、「何となくできる／できない」という印象で済ませていた子どもの言語能力について、客観的に考える機会をもつことが大切です。また、「DLA」は複数回に分けて無理なく少しずつ行うものであることから、使いながら慣れていくことができます。

③ 説明書をダウンロードして読みましたが、具体的なやり方がイメージできません。他に参考となる資料はありますか。

A 動画サイト（下記：吹き出し参照）では実践の様子を解説付きで見ることができます。また、「そもそも『DLA』自体がイメージできない」「難しそう」などという印象がある場合は、説明書を通読する前に一度動画を視聴することをおすすめします。



帰国・外国人児童生徒等の日本語能力を把握する際に大切なことは、児童生徒が何を、どのように学んでいるのかをはっきりと理解することにあります。また、指導者が日本語能力を把握することは、児童生徒に対して、何をどのように学んでほしいのか、最終的に身に付けさせたい力や学習のゴールはどこにあるのかを明確にする上でも、重要です。

DLA～外国人児童生徒のための JSL 型アセスメント（日本語能力測定方法：PDF 資料）
➜http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

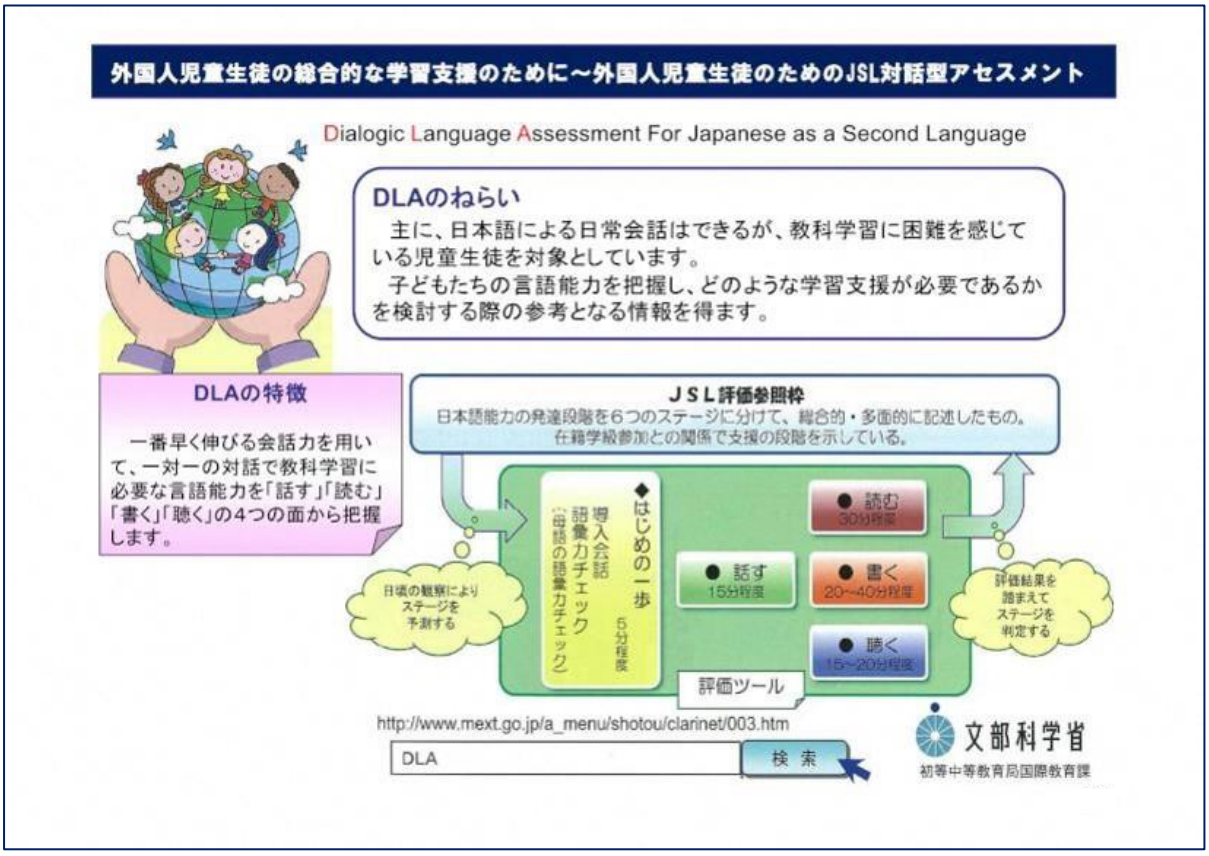
DLA～外国人児童生徒のための JSL 型アセスメント（日本語能力測定方法：映像資料）
➜http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/news/jsl-dla.html

④ 『DLA』は、子どもの目の前で、対話しながら評価することができるのでしょうか。

A 『DLA』ではその場で評価せず、録音等を行って事後に評価することが推奨されています。

⑤ 指導者の判断で日本語指導が必要かどうかを決めていいのでしょうか。

A 日本語指導が必要かどうかの判断は、校長先生の責任で行います。その際、指導者を始め、児童生徒の学級担任や各教科を担当している教員、日本語指導補助者などが児童生徒の実態や日本語能力を把握、測定した結果等を校長先生にお知らせしておくことが大切です。

⑥ 『DLA』を実施した後、評価の結果をどのように活用するといいのでしょうか。

A 「ＪＳＬ評価参照枠」を参考に、「支援の段階」の目安が分かります。どの程度の支援を要するのか、または自律的な学習活動ができるかどうかなどを判断する手がかりとなります。また、「読む」「書く」「聞く」「話す」の技能別評価に基づき、子どもの強い点・弱い点を分析的に把握して、学習指導に役立てることができます。